筋違いに通ってはならない。通った者をからめとり、当方に突き出せば褒美をやるというのは、どうも理解に苦しむ。

徳川家康の農民観は、幕藩体制の下では通念のように全国的に行われた。百姓は為政者の思うがまゝの道具であった。

百姓は飢寒に困窮せぬ程に養うべし。豊なるに過れば農事を厭ひ業を易る者多し困窮すれば離散す。

東照宮上意に、郷村の百姓共は死なぬように、生きぬ様にと合点致し、収納申付様にとの上意は、毎年代官衆支配所へ御暇贈る節仰出されしと云えり。

（昇平夜話による）

表紙解説

崇圓寺宝篋印塔

宇目町酒利崇圓寺所有

この宝篋印塔は、宇目町では珍らしく優雅な形をし、中央色豊かな塔である。

総高二百五十センチメートルで、下から基礎・台座・塔身・天蓋・相輪からなり、塔身の四方に金剛界の四仏の梵字が陰刻されているところであるが、残念ながらこの塔の塔身ではない。

もともとこの宝篋印塔は、崇圓寺の川向いにあったといわれる見徳寺内に有ったが、その後、崇圓寺の裏山に移し、さらに現在地に移したと伝えられている。その時に破損したのか、紛失したのか、いずれにしてもこの塔の塔身ではない。

この塔は、基礎に彫られている格狭間や、笠の隅飾突起などの作風からみると、南北朝末期の作に間違いない。

崇圓寺の建立は、慶長六年（一六〇一）深田弾右衛門忠豊の命により、正覚山崇圓寺禿翁大和尚が開山したとあるが、この時すでに見徳寺は無くなっていた。

軸丸　勇著「ふるさとの文化財うめまち」より